

もくじ 船津静作翁に連なる人々 1P 松方三郎と浮世絵コレクション 3P  
学童疎開コーナー新設/注目される博物館の収蔵資料 4P

# 足立史談

## 第593号

2017年7月15日

足立区教育委員会

足立史談編集局

足立区立郷土博物館内

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(29-308)



船津静作が植樹と管理に尽力した桜、品種名「太白」(写真提供 樋口恵一氏)

## 船津静作翁に連なる人々

### 伊澤隆男

明治四十三年(一九一〇)の年も押し詰まった十二月二十八日から三十日にかけて荒川堤から採取された五色桜の苗木は明治四十五年三月、ポトマック河畔に植樹され、以後今日までポトマック河畔の桜は日米の友好親善の記念碑として多くの人に語り継がれることになった。

船津静作翁は、ワシントンに荒川堤の桜を贈った際の、桜の苗木の選定に中心的役割を果たし、その後のいろいろな話に陰の功労者として登場する。

船津静作翁は、安政五年(一八五八)四月十一日、旧北足立郡里村(現川口市里)の船戸家(日光御成道鳩ヶ谷本陣船戸家の分家の一つ)に船戸徳助・ちようの次男として生まれた。来年、平成三十年(二〇一八)は生誕百六十年になる。このこと

に関連して、来年にかけて、桜のこと以外の、今まで知られていなかった船津家、船戸家、あるいは静作の周辺の人物群に光を当ててみたい。

船津静作のルーツは、川口市鳩ヶ谷地区の日光御成道鳩ヶ谷宿本陣船戸家である。



静作の父、船戸徳助  
洋画家 角井厚吉による肖像画

本陣家の初代船戸大学は甲州浪人の船越大学といわれており、(江北船津家に伝わる古文書による)大学から静作の父、徳助までで九代、静作が大学から数えて十代目にあたる。この系譜は、二男が家を継ぐことも含めて静作及び静作の孫の金松まで全て親子の血筋で繋がっている。

船津静作は川口市里で十七歳まで過ごしたが、若い頃の勉学については、神根村根岸(川口市安行領根岸)にあった日蓮宗妙藏寺で、当時の教養である漢詩文を勉強した。このことについて故船津富彦氏(船津静作の孫、元東洋大学教授・中国文学)に伺ったところ、日蓮宗妙藏寺で間違いのない事だった。また、近年この妙藏寺の当時の寺子屋の教科書が東京都足立区で復刻されたこととであるがまだ確かめていない。

次頁左の写真は、船津富彦氏のアルバムから写させてもらったもの



17 歳の頃の船津静作の写真

で、埼玉県北足立郡北平柳村大字里、石田又七、船戸駒次郎、明蔵寺、船津静作とあり静作が十七歳の頃の写真。

ここで、船津静作と桜との関わりについて改めてご紹介することにします。このことは、今まで何度も紹介されているが、重複する点についてはお許しいただきたい。

船津静作は明治七年（一八七五）十七歳のときに、南足立郡江北村沼田（現東京都足立区江北）の船津家を継いだ。江北船津家第九代である。

明治十九年、船津静作が二十九歳のとき、当時の江北村長の清水謙吾の発案で荒川堤（熊谷堤）の補修工事に際して、堤上に里桜を植えることになった。桜は、駒込傳中の植木屋高木孫右衛門の保存していた里

桜の名品を清水村長の意見で植えることとなった。船津静作はこの作業に率先して加わり、植樹総数三千二百二十五本、江北村から西新井村にかけて里桜の一大並木ができあがった。この桜並木の特色は、里桜の名品を集めたということ、五色桜の名の通り、他に見られない特色を有するものである。

船津静作は、荒川堤の桜並木ができてから、桜の管理を任せられ桜の研究に没頭し、その保護育成に尽くして東京の名所に育てた。

船津静作は熱心にその種別、分類、研究を行い、明治三十六年に初めて植物学者の三好学にめぐり合っており、その桜人生が花開くこととなった。

ワシントンに送る苗木の採取について、その発端は明治四十三年十二月十三日付けの農商務省技官の熊谷八十三氏からの手紙だった。この手紙及びそれに対する船津静作翁の対応のやりとりは以下の通りである。

この手紙は、故船津金松氏が所蔵していた。このことに関しては船津金松氏の著述の「ワシントンのサクラ」（採集と飼育 第30巻4号）より抜粋させていただいている。

農商務省農事試験場園芸部技師熊谷八十三氏から船津静作翁に宛てた手紙。

「未夕拝顔ヲ得ス候ヘドモ尊名を

### 船戸家初代から船津静作までの系譜

- 初代 船戸大学 天正 12 年 (1584) 没
- 二代 船戸織部 大学の長男 (1620 頃没) 徳川家康鳩ヶ谷通過
- 三代 船戸久兵衛 二代織部の長男 (1664 没) 日光御成道本陣
- 四代 船戸久兵衛 三代久兵衛の長男 (1693 没)
- 四代久兵衛の四男 徳右衛門→ 沼田船津家分家
- 四代久兵衛の六男 助右衛門家次→ 川口里船津家分家 (1689)

- 里船津家初代 助右衛門家次 (1722 没) 船戸大学の屋敷跡を受継ぐ
  - 里船津家二代 助五郎 家次の長男 (1744 没)
  - 里船津家三代 助右衛門 二代助五郎の長男 (1783 没)
  - 里船戸家四代 助右衛門 (実名安左衛門・遠山より入婿) 三代の長女ソエ子。里船津家は四代から八代まで船戸家を名乗っていた。この夫婦には男子が生まれなかった。(1832 没)
  - 里船戸家五代 助右衛門仙甫 (実名助八 二代助五郎の三男、御徒士組と力羽鳥助五郎の次男、1861 没) ここまでで初代船戸大学から八代目
  - 里船戸家六代 政三郎 (1838 没) 五代目の長男。若死。相続にいたらず
  - 里船戸家七代 徳助 (五代助右衛門の次男、1898 没)
  - 徳助長男 駒次郎 里船戸家第八代 (1906 没)
  - 徳助次男 静作 沼田船津家第九代を継ぐ (1929 没)
- 船津静作まで、本陣家初代の船戸大学から数えて十代目となる。  
この系譜は静作まで全て血筋でつながっている。

理学博士三好学氏ヨリ承ハリ突然ナ  
ガラ御面倒ノ儀御依頼シ及ビ候、曾  
テ東京市ヨリ米国政府ニ日本花桜ノ  
苗数百本ヲ寄贈セル有之候ニ其苗米  
国紐育州ニ着セル後病害及虫害ノ附  
着寄生セル多カリシ為メ遂ニ焼棄サ  
レタル有之候テ為メニ甚シク面目ヲ  
失シタルコトハ昨年十一月ノコトニ  
テ御座候、然ルニ今回東京市及紐育  
在留本邦人ハ再ビ完全ナル桜苗ヲ寄  
贈シテ面目ヲ恢復セント欲シ苗木作  
成ノ監督ヲ農商務省ニ出願シ農商務  
省ヨリ園芸部ニ命セラレ候然シテ寄  
贈スベキ本数ハ六千本トノコトニ候  
故接木ハ少クトモ其倍数ヲ仕立テ其  
内ヨリ選択スルノ必要有之候ガ之ニ  
用キルベキ精確ナル接穂ヲ求ムルノ  
必要ヲ生シ候然シテ此等ノ儀ニ付三

好博士ノ意見ヲ伺ヒ候処種類ハ染井吉野ヲ大部分トシ他ニ長州緋桜、大提灯、一葉、関山、普賢象等ヲ仕立ツベク尚其外ニ少数ノ御衣黄、滝香、駿河台香ヲ加フベシトノコトヲ教示サレ候此等ノ種類ノ精確ナル接穂ヲ得ベキ件ニ付キテハ貴殿ニ御相談致スベシトノ御指示ニ有之候故突然ヲ顧ミズ手紙ヲ以テ御高見相同ヒタル次第二御座候則チ前述各種類ノ接穂ヲ明治四十四年二月〜三月頃購入スベキ途ニ付御教示相成度甚恐縮ナガラ此段宜シク願上候」

この手紙にたいして船津静作翁は、荒川堤上のサクラは東京府で管理しているから、その採取には府の許可がある旨返書したものと恐れ、それにたいして熊谷氏は、

「御書面拜見致候色々御周旋深謝仕候尚何分ニモ宜シク願上候御申越二依レバ荒川堤ノ桜ハ東京府ノ物故府庁ノ方ニ許可御願ヒ出テ被下ベク候由則チ当方ヨリモ園芸部主任技師恩田鉄弥ノ名ヲ以テ東京府内務部長迄依頼状差シ出シ置キ候則チ貴下ヨリ申シ出デアラバ充分便宜ヲ計ラハレタキ旨依頼置キ候間此段御諒承成度候」と返書している。

さらに東京府から許可がおりて、接穂採取となった。

この手紙の熊谷八十三氏は、昭和

四十四年十月二十二日、九十五歳で亡くなられたが、亡くなる三日前に農業史学者の青木恵一郎氏に日記を託している。

熊谷日記

明治四十三年十二月二十八日(水)

・・・駒込上富士前に桑名を訪問、同道して江北元沼田の船津静作氏を訪問、昼食の御馳走になり午後荒川堤に行き台帳を照合、選抜して印をつける。西ヶ原の下宿屋に入る。

明治四十三年十二月二十九日(木)

桑名ら三名と農夫一人を雇い荒川堤に行く。揃い印をつけた木から接穂を切る。船津氏方で荷造りをして王子の運送店から発送した。

明治四十三年十二月三十日(金)

朝、荒川行、穂枝採取、大いに捗る。大体結了、船津氏は相変らず、付いて居てくれる。桑名、野村氏も手伝、昨日の如し、飛鳥山下の西洋料理三人(熊谷、桑名、野村)で三円、夫から西ヶ原下宿の払は一円六十銭に祝儀一円。

この後、明治四十五年二月桜の苗木は横浜港を出発、三月二十七日、ポトマック公園で植樹式、四月二十八日、ニューヨークで植樹式となる。

(川口市郷土史会会員)

浮世絵展「美人画名品選」より

松方三郎と浮世絵コレクション

小林 優

七月二十二日(土)より、郷土博物館では浮世絵展「美人画名品選」春信・歌麿から芳年・周延まで一を開催します。約一三〇〇点にのぼる所蔵浮世絵の中から、その中核を占める「松方三郎コレクション」の作品を軸に、前後期八十九点の美人画が、展示室を華やかに彩ります。そこで今回は、展覧会の柱となるこの「松方三郎コレクション」についてご紹介いたします。

■コレクションの形成者、松方三郎

松方三郎(一八九九〜一九七三)は、第四代・六代の内閣総理大臣、松方正義の息子であり、昭和十七年(一九四二)に正義の長男、巖が没した後は、その家督を継いで松方家の当主となりました。兄には川崎造船



松方三郎コレクション  
鳥文齋栄之《略六歌撰 遍照》

所の社長にして、現在の国立西洋美術館西洋絵画コレクションの基盤(松方コレクション)を形成した松方幸次郎(一八六六〜一九五〇)などがおり、三郎は幼くしてこの幸次郎の養子となっています。京都帝国大学経済学部卒業を経てヨーロッパへ留学した後、南満州鉄道株式会社東亜経済調査局に勤務し、社団法人同盟通信社(後の共同通信社)設立の後には同社に勤めて調査部長、総局長、理事などを歴任して、日本ジャーナリズムの重鎮となっていました。

また、登山家としても大きな足跡を残しており、ヨーロッパ留学中にスイス、イギリスで山岳会の会員となる他、大正十五年(一九二六)には日本登山界の草分けである榎有恒(まきゆうこう)と共に、秩父宮雍人親王に随行してアルプス山脈マッターホルンの登頂を果たしています。戦後は日本山岳会の会長に就任し、晩年となる昭和四十五年(一九七〇)には、日本山岳会エヴェレスト登山隊の隊長として、松浦輝夫、植村直己を日本人初のエヴェレスト登頂へと導きました。

■芸術の理解者という側面 ジャーナリスト、登山家として活躍した三郎のもう一つの側面が、芸術文化の理解者として

の顔です。

まず三郎は、『麗子像』(大正一〇年、東京国立博物館蔵)で知られる洋画家、岸田劉生(一八九一〜一九二九)の顕彰者でした。学習院中・高等科の学生であった時分から、雑誌『白樺』を拠点とする「白樺派」の作家・画家たちとの交流をもっており、白樺派の活動に傾倒していた劉生とは、この段階から親交を持つていたと考えられます。昭和四年(一九二九)に劉生が満州へ赴いたのも、南満州鉄道社員だった三郎の招きによるものだったとも言われ、昭和三十年(一九五五)の「没後二十五年記念 劉生展」(銀座松坂屋)開催に際しては、劉生の盟友である洋画家の木村莊八らと共に三郎も図録に評論を寄せるなど、その人と作品を評価し続けました。そしてその後、三郎は東洋文庫理事や日本芸協会会長などを歴任していきませんが、その傍ら、力を注いでいたのが、浮世絵の蒐集だったのです。

■松方三郎コレクシヨンの浮世絵

三郎の蒐集による浮世絵コレクシヨンは世に明らかとなったのは、昭和六十三年(一九八八)のことです。原宿の太田記念浮世絵美術館で「松方三郎コレクシヨン 浮世絵美人画名品展」と題してその一部が初公開されたのです。当館の収蔵資料となったのは、その翌年のことでした。

三郎が浮世絵に対してどのような理解を持っていたのかは定かではあ

りません。しかし、兄の幸次郎は浮世絵の蒐集家(そのコレクシヨンは現在東京国立博物館所蔵)としても著名であり、自身もまた昭和三十一年(一九六四)に日本浮世絵協会(現国際浮世絵学会)の理事に名を連ねています。三郎の蒐集が兄の影響を受けてのものだったかは明らかではありませんが、総数四一三点にのぼるその内容は、元禄前後の初期浮世絵から明治に至るまでの様々な作品が網羅されており、三郎が特定の作者やジャンルに集中せず、浮世絵の通史的な系統を丁寧抑えてコレクシヨンを形作っていったことを伺わせます。またその中には、喜多川歌麿など江戸の当時から高い評価を得た絵師の希少な作品が多く含まれる他、歌麿と同時代に活動した鳥文斎栄之の《略六歌撰 遍照》(やつしろつかせん へんじょう、寛政五〜一〇年、前頁左下)のように、他に現存の確認出来ない逸品も見られるなど、三郎が浮世絵に対する確かな見識を持って蒐集に臨んでいたことを感じさせるのです。

「美人画名品選」では、この三郎コレクシヨンの一部と他の所蔵作品を合せて展示します。浮世絵に描かれた女性たちの鮮やかさと共に、それら名品の蒐集にかけた松方三郎の情熱も感じて頂ければ幸いです。

(郷土博物館学芸員)

常設展示に「学童疎開」の

コーナーが新設されました。

郷土博物館の協働グループ「学童疎開を語る会」の収集した情報や資料をもとに、郷土博物館の二階「狙われた東郊の工場街」のコーナーに、学童疎開を紹介する展示が新たに加わりました。元疎開児童である木嶋孝行氏が制作した疎開先、長野県高山村の高井寺の再現模型と、当時の足立区学童の集団疎開先などを記したパネルが展示されています。また、本年も学童疎開資料展が開催されます。ぜひ足をお運びください。

学童疎開資料展

会場 足立区役所庁舎アトリウム  
会期 平成29年8/1(火)〜5(土)  
時間 午前9時〜午後5時(初日は午後1時開始、最終日は正午まで)

注目される博物館の収蔵資料

近年、郷土博物館で保管する美術資料が注目を集めており、専門の研究者によって各書籍で取り上げられています。

■『國華』第一四六〇号

(國華社、二〇一七年六月)

『國華』は明治二十二年に岡倉天心を中心として創刊された、国内で最も古くから続く美術雑誌です。今号に掲載された玉蟲敏子氏(武蔵野美術大学教授)の論文「酒井抱一の俳贊をめぐる諸問題―「富士に帆掛舟図」と「正月飾り物図」を紹介しつづ―」で、当館寄託の酒井抱一俳贊、鈴木其一ら合筆《正月飾り物図》(文化十三年)が取り上げられ、抱一らによる現足立区内での活動と共に、その制作背景などが示されました。

■鈴木堅弘著『とんでも春画

妖怪・幽霊・けものたち』

(新潮社、二〇一七年)

妖怪や幽霊など、奇怪なモチーフによる春画を取り上げ、解説した一冊。著者の鈴木堅弘氏(京都精華大学非常勤講師)には平成二十八年、区内より新たに発見された春画作品の検証にご協力頂き、その時に調査した作品から、河鍋暁斎筆《大津絵風雨帖》(明治時代)と、肉筆春画絵巻《僧婦夢物語》(江戸後期〜明治、いずれも現在郷土博物館所蔵)の二点が本書中で紹介されています。



新設された「学童疎開」のコーナー